

《目的》江戸時代、武家礼法の中心をなしたのは小笠原流であったことは周知の事実である。その特異性に注目し、小笠原流をさらに四派に分類したのは島田勇雄氏である。島田氏の分類によれば、小笠原流は、総領家、京都小笠原家、赤沢家、総領家の系統で在野で指導をした庶民派に分類されることとなる。このうちの庶民派を除く三家は、大名や旗本であり、礼法に関してはどちらかと言えば保守派であったといえよう。そのため礼法家としての積極的な活動は見る事ができない。それに対して、庶民派は革新的なところがあり、あらたな礼儀作法の分野を確立したりいわば家元的存在として多くの門弟を獲得したりするなど活動的であった。その庶民派の中で特に着目される存在が水嶋ト也之成である。この水嶋ト也之成の礼法家としての位置づけと伝授系路の明確化を行うことを目的とする。

《結果》水嶋ト也之成については、『水嶋家由緒書』（宮内庁書陵部所蔵）によってその生い立ちなどがほぼあきらかとなった。七十五歳の天和元年（1681）に徳川綱吉の世継ぎ徳松君の髪置の儀式を執り行ったことは有名であるがどのような経緯で礼法家となったか、また門弟三千人と評判をとるようになるまでの経緯など興味深い点が多い人物である。また、水嶋流には、水嶋ト也之成から高弟の伊藤甚右衛門幸氏へと続く伝授系路と、森平格へと続く伝授系路の大きくわけて二系統が存在することがあきらかになった。